

## 第42回日本死の臨床研究会の記録

### 大会長講演

1. ひらかれた看取りをすべての人と 死と臨床と私 三宅 智
2. ひらかれた看取りをすべての人と「いのち」と「死」を見つめて一死の臨床を語るとは 梅田 恵

### 対談

1. ひらかれた看取りによせて一死の臨床の黎明期からの道 柏木哲夫
2. ひらかれた看取りによせて一死の臨床の黎明期からの道・温故知新 田宮 仁

### 世話人代表退任記念講演

1. 苦しみに向き合うカー支える力 山崎章郎

### 特別講演

2. 「いきかた」準備—アクティブ・エンディング 金子稚子
3. 修業とは何のためにあるのか 柳澤眞悟阿闍梨
4. 人工知能AIの現状とこれから—生と死を考える 山田誠二

### 特別企画

2. リレー・フォー・死生観—在宅における看取りの体験から 石口房子  
リレー・フォー・死生観 菅野千秋  
リレー・フォー・死生観 小池宜子
4. キッズミュージカル 心結び・田んぼオーケストラ 魚沼産☆夢ひかり  
—大切なことは子どもたちが教えてくれる 副島賢和  
キッズミュージカル 心結び・田んぼオーケストラ アナボヌ実砂子

### 教育講演

1. 聖地のちからと身心変容 鎌田東二
2. アドバンス・ケア・プランニング 木澤義之
3. 小児がん経験者の自立支援 林 三枝
4. 死亡直前期の研究—看取りの現場で困っていることを研究する醍醐味 森田達也
5. 終末期の家族ケア—親と死別する子どもへの支援 井上実穂
6. 人生の最晩年の生を支える 桑田美代子
7. 極楽と天国の原風景—人は死んだらどこへ行くのか 若麻績敏隆
8. 認知症と共に生きる人たちの人生を支える 水野 裕
9. 小児の在宅医療と多職種連携—医療的ケアを必要とする子どもと家族の暮らし 高橋昭彦
10. 自然に学ぶ死生観 中野民夫
11. 子どもとマインドフルネス 得丸定子
12. 産声をあげる時、息を引き取る時に耳を澄ませて向かい合う 内藤いづみ
13. 生活のなかにある死—地域に“寄りそ医”25年の私が診てきた家逝き人たち 中村伸一
14. ホスピスで死にゆくということ—日韓比較からみる医療化現象 株本千鶴
15. スピリチュアルケアを再考する 河 正子

16. 死にゆく人に学ぶ：看取りの時期の見立てとコンセンサス形成  
 家族のところに届くケア—スピリチュアルケア・グリーフケア 川上嘉明
17. 自殺行動の理解と自殺リスクへの基本的対応 勝又陽太郎
18. トキが永住できる生息地づくりを目指して 関島恒夫

**パネルディスカッション** 場の持つちから、人の持つちから—自分らしく安心して病と共に過ごすために  
 座長コメント 林 章敏・秋山正子

1. 患者力を高めるピアサポートの現場より 坂下千瑞子
2. 環境と人が織りなす「第3 の場所」—マギーズ東京の担う役割 秋山正子
3. 建築環境が人の心を癒す、イギリスのがん患者とその家族、  
友人たちのための無料相談施設、マギーズセンター 佐藤由巳子
4. 既存の家を活用したホームホスピスでの“とも暮らし” 松本京子

**シンポジウム1** どうする？日本の看取り—2040年の未来予想図

座長コメント 中山祐次郎・前澤美代子

1. 市民と共に行う意思決定支援 横山太郎
2. 医療現場における臨床宗教師からの視点 田中至道

**シンポジウム2** ケアする人自身の心のケア—「あなた自身のケア、していますか？」

座長コメント 高宮有介・山崎智子

1. “いま・ここ”の気づきを臨床の現場や日常生活に活かす！ 土屋静馬
2. マインドフルネスを体験し、あるがままに触れる 朴 順禮
3. 忙しい毎日のなかでのマインドフルネスと自然体験 中野民夫

**シンポジウム3** 日本人にとっての幸せな死とは

座長コメント 今井洋介・酒井禎子

1. 日本人にとって幸せな死とは 尾角光美
2. 日本人にとって幸せな死とは 郷堀ヨゼフ
3. 「幸せな死」について考えるうえで押さえておくべきこと 小西達也・山崎章郎

**シンポジウム4** 神経難病患者の死とどう向き合うか—声なき声に耳を傾ける

座長コメント 岩井直路・山口聖子

1. 病院のALS 専門診療の立場から死とどう向き合うか 中島 孝
2. 在宅医療の実践の立場から 波江野茂彦
3. 訪問看護師の支援を考える 山岡栄里
4. わが道を明るく照らす家族あり われ迷わずに今日を迎えたり  
—難病ALS 患者と過ごした家族の記憶 平澤林太郎

**シンポジウム5** 被災地における「not doing, but being」 座長コメント

儀賀理暁・粕田晴之

1. そこに緩和ケアがあった 儀賀理暁・渡邊優紀・國澤洋介・松崎正子・小峰和美
2. なぜ“お茶っこ”だったのか—being のもつ力 奥山慎一郎
3. 悲しみの底に息づく音楽に耳を傾ける 植木亜弓
4. 一人十色の人生観—被災地で感じたさまざまな関わりのなかから 太田宣承

## シンポジウム6 地域にひらかれた看取り

座長コメント 黒岩卓夫・黒岩秩子

1. 地方都市における在宅看取りと死についての市民との対話の経験 廣澤利幸
2. 看取りと死別を支え合う地域社会をつくる 山崎浩司
3. 住みやすい街・住み続けられる街・住み終わられる街 布施克也

## シンポジウム7 さまざまな看取りの体験から考える

座長コメント 田村恵子・斎藤忠雄

1. さまざまな看取りの体験から考える—急性期の立場から 宇都宮明美
2. 緩和ケア病棟での短い経過を辿る死の検討 篠川 主
3. 子どもの看取り—子ども、家族の人生に触れる体験 松岡真里
4. 先に逝かれた人々の賢慮と自己決定—看取りと看取りの周辺から 長谷方人

## 企画委員会主催シンポジウム 真の援助者を目指して

座長コメント 小澤竹俊

1. 患者の希望に寄り添い続けること 青木尚子
2. 本人にとっての最善を共に考え、誠実に関わり続けるために 山崎まどか
3. 出会いから別れまで携わらせていただく、その思い 大嶋健三郎
4. 何もできなかった自分でも大切な仲間がいるから、苦しむ人の前であっても「無敵」になれる 津野采子

## 国際交流広場

1. 臨床の現場で意識を澄ます—緩和ケアとエンド・オブ・ライフ・ケアに活かす禅の教え 藤井義博・鈴木有紀
2. 地域・ホスピス・病院：それぞれの場所でマインドフルネスなケアを育む 栗原幸江・御牧由子

## ワークショップ

1. アドバンス・ケア・プランニングの支援のコツ 座長コメント 津金澤理恵子
2. 対話を通して考える—「相手の価値観を理解し尊重する」とは 座長コメント 新幡智子・市原香織

## 教育研修ワークショップ 死の臨床におけるコミュニケーション—スピリチュアルケア目指して

馬場祥子

## 芸術・芸能と講演

1. 冥途のみやげ・新潟水俣病患者のいのちを見つめて+ 渡辺参治さんによる「うたは百薬の長」  
発表者 旗野秀人  
司会者 今村達弥
2. 和南津花笠甚句  
発表者 丸山健一  
司会者 得丸定子
3. 最期の晩餐 そしてエンディング・ソング  
発表者 本道佳子  
発表者 日比野則彦・愛子  
司会者 長谷方人

## 事例検討

1. 若年成人がん患者のエンド・オブ・ライフ・ケア  
—診断から看取りまで、希望実現に向けた関わりと課題 貞方初美
2. 双極性障害を発症した患者の希望をどのように支えるか 河口智子
3. セクシュアリティな問題に対峙した時の苦悩—精神発達遅滞の患者との関わりを通して  
杉山小百合
4. 多忙な病棟業務のなかでの患者の希望—チームワークを育み真のケアにつなげる 松本友梨子
5. 最期の日まで逝く人は家族を思いやる  
—家族のために鎮静を希望した 50 歳代のケアマネジャー 高村一郎
6. 非がん性慢性疼痛とスピリチュアルペインを有する在宅パーキンソン病患者に対する  
多職種連携での支援 花田 梢
7. 母親は自分の死を幼児期の息子にどう伝えたかったのか 中川恵理子
8. セルフネグレクト状態の終末期がん患者とその家族への在宅での関わり 渡邊まこ, 他
9. 成人の発達障害とデスカンファレンスで診断された患者の怒りに,  
職員が燃え尽きようとしています 林 良彦
10. 医療者が中止することを強く求めたにもかかわらず遠方への旅行を実行した  
終末期がん患者の 1 事例 泉里昭予, 他
11. 依存性・攻撃性が強かった事例（境界性パーソナリティ傾向）の立体的検討  
—主治医の立場から 畑 譲
12. 緩和ケア病棟での療養を選択しながら治療継続の可能性に苦悩した家族への支援 村木明美
13. 最期まで蘇生延命処置を希望された緩和ケア病棟入院患者の看取りについて 大場一輝
14. 集中治療域における患者の意思決定支援  
—意識レベル回復後に本人への意思確認が困難であった 1 事例 田中絵美子
15. 急性期病院での終末期患者との関わり—意思決定支援のあり方を考える 生田陽子
16. 医療資源の乏しい離島在住の終末期患者の治療中止に伴う意思決定支援 松山智子
18. DNAR の判断を迫られた妻の苦悩からの学び 真上三千子
19. 心肺蘇生を強く希望する家族とのコミュニケーションに困難さを感じた 1 例 矢吹律子
20. 筋萎縮性側索硬化症患者との関わり  
—症例を通して学んだこと「その人らしく」生きるために必要なこととは 三浦日和
21. それぞれの生き方—ホームホスピスができること 堤 健太
22. 親の自死を目撃した子どもへの危機介入として医療現場にできること 久野美智子
23. 「狂った夫と 2 人暮らし」—配偶者暴力を受けたがん患者との関わり 木村純子
24. 終末期を独居で過ごし自宅で永眠したがん患者 加藤麻樹子
25. 病状の進行を受け入れようとしなかった患者のケアを通して 駒野さちよ
28. 「あっかんべえ、でありがとう」—看護小規模多機能型居宅介護サービスによる  
在宅ホスピスケアのすすめ 斎藤忠雄, 他
27. 「4 回目の人工呼吸器はもう着けない」—終末期非がん患者の意思決定支援における  
医療者の葛藤 佐藤直子

## 原著

1. 死別父子家庭の父親が感じる困難感と自治体におけるひとり親世帯支援事業の現状および課題  
(続報) 倉林しのぶ, 他

## 調査報告

1. 看護師が感情を表出できるデスカンファレンスがもたらすグリーフケアとしての効果 中浦裕子
2. 犯罪被害による子どもの死が児童期・青年期のきょうだいに及ぼす影響の探索 赤田ちづる、他